発達 204

分析 - 総合過程の組織化と言語化

河崎 道夫
（東京教育大学）

（目的） 人間はまだ概念化されていない課題対象を言語化しながら系的に認識していくようになる。この点での言語の発達に対する機能的意義は一般的に肯定的に受け入れられ、しかし言語と認識の関係の発展的論考を可能にするために単に学習結果と外から与えた言語化との関係をみるだけでなく、被験者の言語化過程がどのような学習過程を伴っているか考えられる必要がある。本研究では、言語化過程の観察から分析を関与する要素の関係を示し、被験者が言語化を行った上で指定する条件を示すという形で、被験者の言語化プロセスを考察することにした。被験者は２人のグループに分け、グループの一部を対象として分析を行う。

分析 - 総合

分析方法

実験条件

実験日時：1974年6月〜7月

被験者：18名から24名までの大学生38名

材料・課題：下図のような6枚のランダム四角形カード。

这些的うち2枚を1ペアとして、さらに3ペアの集合を1組にし、ペアの組み合わせを変えて3組を作成する。これらの1組から3組までのそれぞれのペアの内容を被験者がカードを再生示しながら実
図の反応調査時間に差があった。Log N/V, N: 43.4, V: 129.9, 且 = 4.32**。
2) 仮説②について: 仮説② (N/V: 43.4, V: 216.6, 且 = 3.44**), 綱導到達までの回数 (N/V: 43.4, 且 = 5.1, 且 = 2.44**) と同様 N/V群が反応が多かった。因-2, 因-3 反応調査時間では差がなかった。
また図の反応時間について両群に差が見られた。

【考察】
仮説①については従前の反応調査に関する言語に効果が見られた。言語は仮説①と見解到達までの回数を減らすといえる。しかし、「命題」その一との教示のとり扱い方及びその断定にどのように決めたであろうか。以下の仮説のと
り前の最初の反応調査時間に見られた N/V群
とV群の差が注目される。これは N/V群が図形の
非例をしないように最終目標である図形の非例か
間を直感的に着想し対応するか、V群まで
名詞をつけるようにまず図形の特徴の分析から
着想し、ついて完全な命言により図形の特徴
（絵図）を行い対応。その図形の相互
関係の分析一語は基本的レベルを構成するのであ
る。以後、V群を図形の非例ありと非例ありと考え
えてはよくなることになる。これに対し N/V群は
図形の変化パターンの差がこのことを示す
（図-4）。またこのことは規則到達2回の反
応行数からも考察しうる。N/V群では規則到達
面前ではもはや1〜3反応であり、V群は1反応
しか、これは N/V群が「晩生」、V群が「急激に
でて」規則到達することを示している。それ、N
V群は語彙の分析一語はさらにさらに進行
させていくため最後まで図形の一と区別できない
ことのあるのない N/V群では規則到達では恐れ
あるが語彙の分析一語だけが行えるかの
うえを考察する。さらに N/V群の非組織的な
進行を指すことがから、語彙はその後の被験者の報告
から考える。「恐れあり勢をもたれるためににど
んな工夫をしたか」という問い合わせに対して「なると
なると感じ」と「否を知る」という回答を
4名の被験者をしている。
以上のことを考えて語彙の言語には重複的な
分析一語は進行の非組織的な進行を指していること
がある。さらにこの反応調査を保証するものは
何があるかという観点が設定されれば発展的であろう。
それをこれに、経験的にそれを示すか示さない時
に制限されると対応の一それは行うべきである
用意を忘れない。一度を示すと言葉にたた
どの言葉を図形と
話すつついてゆくと考えれば、一時的制限と言葉に
たたのは基調を図形的表現がうかがいであってく
るだろう。
仮説②に関連しては、答えに図形数と図形到達
までの回数を減らす傾向を示したが、反応調査時
間の変化パターンの読みの減りパターンではN/V群
よりもN/V群に応じたとえる。これは単に2
人の無視の重複的な語彙を考えた方が妥当である。
にもかかわらず、反応調査時間と個人差が大きいこと
図形の名前数がかったことの事実
仮説の発展性を見たいと思う。